

第29回研究発表会

地域資源循環の取り組み・
おかえりやさいプロジェクトおかえりやさいプロジェクトリーダー おかやまともこ
岡山 朋子

地域循環型野菜おかえりやさいとは、地域のスーパーや学校給食、レストランや飲食店などから排出される生ごみを、たい肥にリサイクルし、そのたい肥を使って地域内や近郊の農家で育てられた野菜のことです。この、おかえりやさいの循環の環を繋げて回しているのが、おかえりやさいプロジェクトです。



■おかえりやさいプロジェクトの発足

プロジェクト発足のきっかけは元をたどれば1999年2月の名古屋市ごみ非常事態まで遡ります。当時、名古屋市は、古い焼却工場を止めたことで可燃ごみの処理がピンチに。さらに、最終処分場も2000年には満杯になってしまうと予想されていたので、早急に新しい最終処分場を建設しなければなりません。ところが、名古屋市が購入しておいた名古屋港内の藤前干潟は、渡り鳥の餌場となっていたため、野鳥愛好家などが処分場建設に大反対。結局、名古屋市長は処分場建設を断念し、同時にごみ非常事態を宣言することになったのです。

名古屋市民は、2年以内に20万ton以上のごみを減らし、埋立量を半減させることに成功しました。なんとか非常事態を脱することができましたが、人は平常時に戻ると、たいがい緊急時のことは忘れるもの。リバウンドを恐れた名古屋市は、第4次ごみ処理基本計画の策定にあたって、市民・市民団体、事業者、行政といったステークホルダー（関係当事者）が参加する「なごや循環型社会・しみる

提案会議」を開催しました。これは頻繁に開催され、特に後半は、深堀会議という分科会に分かれて個別テーマについて議論しました。このうち、生ごみをどう減らすかと毎夜のように熱く議論していた深堀会議が、おかえりやさいプロジェクトの母体となりました。

■おかえりやさいプロジェクトの活動

プロジェクトメンバーであるスーパーの生ごみは、発足時すでに市内でたい肥にリサイクルされ、そのたい肥を使ってできた野菜は、名古屋市内の卸売市場で売られていました。そして、スーパーは、その卸売市場から野菜を仕入れていることがわかりました。そこで、プロジェクトは、おかえりやさいを店頭に戻すことで循環の環を繋げることから活動を開始しました。

さまざまな関係者の努力のおかげで、2008年11月、おかえりやさいプロックリーが店頭デビュー（写真1）。販売開始当日の中日新聞朝刊の市内版に「おかえりやさい販売開始」という記事が載ったこともあり、ある店舗のプロックリーはほんの数時間で売り切れてしまいました。

このプロジェクトの活動は、食品リサイクル法にのっとった食品循環資源のリサイクルのシステム、特にリサイクルたい肥を使って育てられた野菜を仕入れて販売するという「循環ループ」の仕組みを、消費者である市民に可視化するというものです。

現在、この企業以外に元々参加していたスーパーや、2社のホテルがメンバーとして参加しており、それぞれおかえりやさいを販売したり、食材として使用したりしています。食品リサイクル法における循環ループと異なるのは、これは1社単独の事業ではなく、同業他社による循環の取り組みだということです。つまり、1社のプライベートブランドではなく、地域ブランドを同業他社で共有しているのです。

おかえりやさいは、地域の特色ある食材ということで、名古屋市学校給食の「みんなで食べるなごや産の日」に、年に1～2回提供されています。「おかえりやさいは、名古屋市のごみ減量に貢献しています」と献立表に記載されています。

このほか、なごや環境大学の共育講座の一環として、毎年3～4回の講座を開いています。おかえりやさいの循環の環をめぐるバスツアーや、クッキング講座などを毎年企画して実施しています。

■おかえりやさいの意義と課題

プロジェクトは、これまで第1回グッドライフアワード・グッドライフ特別賞（2014年）、2016愛知環境賞・中日新聞社賞（2016年）、そして生物多様性アクション大賞・環境大臣賞（2018年）を受賞。法人格のない任意団体であるプロジェクトがこれらの賞を受賞できたのは、ごみを減らして循環型社会をつくるという仕組みを具体化し、それを広く市民

に可視化する普及啓発活動、地域共通ブランドという独創性、何よりも活動を継続してきたことを評価されたからだだと思います。

しかし課題も多くあります。まず、サーキュラーエコノミー（循環経済）が、非常に脆いということ。循環の環のどこか1カ所でも途切れれば、途端に回らなくなってしまいます。また、循環の環を回すことを、小売業者が本業の商売ではなく社会貢献事業であると捉えていることも一長一短です。同業他社が共通ブランドを持ち合う可能性を開く一方、行政からの要請がなければ参加できない、あるいはプライベートブランドがあるので参加できないという事業者も多く、プロジェクトには、実はこれまで小売業者の新規参加は1社もないのです。

その他にも課題山積みですが、みんなで乗り越えながら、循環の環を回し続けていきたいです。もし、同じことをやってみたいという地域がありましたら、どうぞお声かけください。



写真1：店頭に並ぶおかえりやさいプロックリー